特集

松尾芭蕉と『おくのほそ道』

●松尾芭蕉

松尾芭蕉（1644～94）は、伊賀上野（現三重県伊賀市）の出身で、若年の頃、藤堂新七郎家（5千石）に奉公人として仕え、同家の跡取り息子良忠（蟬吟）との縁により俳諧の道に入りました。寛文12年（1672）、芭蕉は発句合『貝おほひ』を地元の天満宮に奉納し、その後、江戸に行きます。

延宝5・6年（1677・78）頃には宗匠となりますが、37歳（数え年）の同8年冬、日本橋から深川に転居しています。この深川への隠棲（世の中の人間関係から逃れて暮らすこと）は、俳諧を文芸として高めるための思索を深めることを目的とするもので、この頃、仏頂和尚に禅の指導を受ける機会もありました。

貞享元年（1684）8月、41歳の芭蕉は『野ざらし紀行』の旅に出ました。その後も『鹿島詣』『笈の小文』『更科紀行』の旅を続け、蕉風を深化させていきます。そして元禄2年（1689）、門人曾良を伴う『おくのほそ道』の旅となったのです。この旅は、まだ見ぬ歌枕（古歌に詠み込まれた諸国の名所）を訪ねることを一つの大きな目的としていました。知人・友人も少なく、多くの苦労を体験する旅となりましたが、各地の人々の温かい情に触れたり、人間を寄せ付けない大自然や歴史に彩られた歌枕・旧跡を辿ることで、芭蕉は無常に生きる人間の尊さを実感するのでありました。この旅を通して、不易流行という考えも生まれることとなりました。

その後、上方を遍歴し、元禄4年冬、江戸に戻ると、軽みの作風を模索していきました。さらに、元禄7年初夏に清書がなった『おくのほそ道』を携え、同年5月、また旅に出て、10月12日、大坂で病死しました（享年51歳）。

●おくのほそ道

『おくのほそ道』は元禄15年、京都の井筒屋から出版され、その後も版を重ね、現代においても俳句を愛する多くの人たちにとっての聖典であり続けています。以下、『おくのほそ道』の主な章の概要を記します。

近世後期の版本、黒羽芭蕉の館蔵

序章

本章には『おくのほそ道』全篇の基調となる主題が無常観であることが記され、旅という非日常こそが自分にとっての日常だという芭蕉の漂泊願望が述べられています。旅の目的地として白河の関と松島があげられ、『おくのほそ道』行脚が陸奥の歌枕遍歴という性格を有していたことがわかります。

旅立ち

旅立ちに際しての芭蕉の心細い思いが綴られ、親しい人たちに見送られて千住で船からあがり、「前途三千里のおもひ」に感傷的になっている姿が描かれています。〈行春や　鳥啼魚の目は泪〉は、巻末の〈蛤の　ふたみにわかれ　行秋ぞ〉の句の伏線をなしています。

室の八島

芭蕉が『おくのほそ道』行脚における最初の歌枕の地＝室の八島（栃木市惣社町の大神神社境内）を訪れ、同行の曾良からその縁起を聞くという内容です。

仏五左衛門

「日光山の麓」上鉢石町宿泊時の宿の主で、万事に正直を旨とし、自他共に「仏」と称する五左衛門の人柄について記述されており、芭蕉は、彼が「無智無分別にして正直偏固の者」である点に心惹かれています。

日光

東照宮の威徳に対する賛嘆・敬意が表され、〈あらたうと　青葉若葉の　日の光〉の句が配されています。

黒髪山

曾良が改めて紹介される章で、旅立ちにあたり剃髪したという彼の並々ならぬ決意も述べられています。黒髪山は歌枕で、男体山のことです。裏見の滝見物のことも記され、〈暫時は　滝に籠るや　夏の初〉の句が配されています。僧による夏行が始まろうとする頃に合わせ、滝の裏側に身を潜めてしばしの滝籠もりという気分で、精進の気持ちを固めることだ、の意です。

那須

「知人」を訪ねるため「那須の黒ばね」へと向かう途中、人里を離れた広い那須野に「野飼の馬」がいたので、純朴にして人情に厚い「草刈おのこになげきよ」って馬を借りたことや、可憐な「かさね」という名の少女との出会いが記されています。

黒羽

『おくのほそ道』の旅で芭蕉が最も長い期間（13泊14日）滞在した黒羽（余瀬を含む）において、黒羽藩城代浄法寺桃雪・鹿子畑（当時は岡）翠桃兄弟ら土地の人々との懇談に昼夜を明かし、風雅の交わりを持ったことなどが記されています。黒羽滞在中の犬追物の跡・那須の篠原・玉藻の前の古墳の見物と八幡宮（現那須神社）・修験光明寺参詣についても記されています。

修験光明寺跡　芭蕉句碑
「夏山に　足駄を拝む　首途哉」

雲巌寺

黒羽滞在中に雲巌寺参詣を果たし、芭蕉が参禅の師と仰ぐ仏頂和尚の「山居跡」を訪ねた記事で、〈木啄も　庵はやぶらず　夏木立〉の句も含め、和尚の徳をたたえることが要点となっています。道中、土地の若者たちと談笑しながら山路を行く場面は、旅で出会った人々との心の交流を感じさせます。

殺生石・遊行柳

前半は玉藻の前（九尾の狐）伝説と謡曲『殺生石』を、後半は西行の伝説と謡曲『遊行柳』をそれぞれ下地とした章となっています。殺生石は九尾の狐が石と化したと伝えられる所で、殺生石を目指す芭蕉に「館代」浄法寺桃雪は馬を貸しています。馬の口を取る馬子に請われて、芭蕉は〈野を横に　馬牽むけよ　ほと、ぎす〉と詠みました。「蘆野の里」の「清水ながるゝの柳」（遊行柳）を訪れた芭蕉の句〈田一枚　植て立去る　柳かな〉では、西行を思い慕う気持ちが表現されています。

白河の関

白河の関に至り、この地を詠んだ古歌が次々浮かび出て、芭蕉の詩精神の高揚が見られる章となっています。眼前の「青葉の梢」を仰ぎながら、梢を渡る秋風の音やその下に散り敷く紅葉を想起し、感銘を深めるというように、芭蕉は眼前の景観（現実空間）と古歌の世界（文学空間）を二重写し的に捉えています。冒頭の「旅心　定りぬ」という表現からは、まだ見ぬ陸奥の入口に立った芭蕉の引き締まった気持ちが感じられます。

佐藤庄司が旧跡

陸奥に入って最初の義経伝説ゆかりの地で、芭蕉が最も心惹かれたのは継信・忠信兄弟（佐藤庄司の息子）の嫁の話です。「二人の嫁」がそれぞれ夫の甲冑を身につけ凱旋の勇姿のようにして、病床の父（庄司）を慰めた話をふまえて、医王寺のことなどを記しています。

飯塚

前半では、飯坂温泉に宿泊した際「雷鳴雨しきりに降て、臥る上よりもり」という状況の中、蚤・蚊にさされ「持病」まで起こってしまう苦痛の一夜となったことが記され、後半では、気持ち新たにこれからの旅に臨む芭蕉の意気込みが表現されています。

武隈の松

能因法師によって古歌に詠まれ、歌枕として名高い武隈の松（二木の松）が、「昔の姿うしなはず」という状態で眼前に現れたことに感激した芭蕉は、〈桜より　松は二木を　三月越シ〉と詠んでいます。

壺の碑

歌枕の推移、天地流転の中にあって、永劫不変の「千歳の記念」たる「壺碑」に接し、「古人の心」を悟り知るところとなった芭蕉の感動が表現された章です。このことが、やがて不易流行論の提唱へと展開していきます。芭蕉がここで目にした「壺碑」は、寛文年間（1661～73）頃に発掘された多賀城改築の記念碑のことです。

末の松山・塩竈の浦

芭蕉は、「壺の碑」の章で感激の余り「泪も落るばかり」でしたが、それとは対照的に、本章では、恋の歌枕「末の松山」が無常を示す墓場となっていたため、大きな悲しみを覚えています。後半に見える「奥上るり」の表現にも侘の色がにじんでいます。

塩竈の明神

「和泉三郎」（藤原秀衡三男の忠衡）が塩竈神社に寄進した燈籠を紹介し、父の遺命を守って源義経を擁護した彼を「勇義忠孝の士」と褒め称えています。内容的には「佐藤庄司が旧跡」や「平泉」との連関性を有し、「平泉」の伏線となっています。

松島

松島はこの旅の中で、平泉・象潟と共に伝統的歌枕として重要な目的地となっており、紀行全体の中でも、本章は「平泉」「象潟」の両章と並び3大頂点をなしています。躍動感を持った景観描写がなされ、擬人的な比喩法により芭蕉の心象風景が巧みに表現されています。

松島の夜

芭蕉にとって松島の月を眺めることは、この旅の当初からの念願でした。本章では、雄島が磯を訪ね、やがて日が没して松島湾の夜景を宿から臨む様子が記されています。

平泉

本紀行のクライマックスとして位置付けられる章です。芭蕉は眼前に広がる平泉の実景を前にして、奥州藤原氏の都で、義経が戦死した古戦場でもある平泉の姿を、眼前の景に重ねて眺めています。「佐藤庄司が旧跡」「塩竈の明神」などの伏線を受け、藤原氏3代の栄華の夢と義経の悲劇的最期をしのび、自然と人生への詠嘆を詠いあげているところに本章の特色があり、不易流行の思想が色濃いものとなっています。〈夏草や　兵どもが　夢の跡〉〈五月雨の　降のこしてや　光堂〉の2句も、自然と人生の流転の相の中の永劫なるものに対する思いを込めて、本章のテーマを物語っています。

尿前の関

岩出山から尿前の関にかかり、山刀伐峠を越えて尾花沢に出る道における旅の苦労の状況が記されています。この道程は、実際の旅程上でも陸奥から出羽へと奥羽山系を横断するヤマ場に相当し、紀行の構成上でも表から裏に移る局面の転換点に位置しています。

立石寺

尾花沢の人たちの勧めで立石寺に参詣した際の記事で、山水画のような趣の同寺について、「佳景寂莫」たる境内の雰囲気が漢詩文調の軽快なリズムで描かれています。〈閑さや　岩にしみ入　蝉の声〉は本紀行中の絶唱の一つです。

最上川

最上川を舟で下った時の模様が描写され、恋の歌枕「最上川」が五月雨で急流となっている雄壮な実景が捉えられており、〈五月雨を　あつめて早し　最上川〉の句が配されています。

羽黒山

羽黒山本坊での俳諧興行や羽黒山の縁起が記され、その「霊山霊地の験効」が讃えられています。

月山・湯殿山

「羽黒山」に続き、出羽三山巡礼の逸話が綴られています。本紀行には、全体的に植物の描写が少ないのですが、本章で「三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばひらける」を発見したことは、自然の生命力への共感を表現したものとして注目されます。湯殿山の神体・山容についての記述がないのは、「此山中の微細」について「他言する事を禁ず」るという掟に従ったためです。

象潟

松島と双称される歌枕で、芭蕉にとって待望の地であった象潟（秋田県にかほ市）の風光に接した印象が綴られています。冒頭では雨に煙った象潟の夕景が描かれ、晴れ渡った翌朝、象潟を舟で遊覧する場面に続き、後半では干満珠寺からの眺望が描写されています。芭蕉は前後4日間の見聞を2日間の記事として集約しており、虚構と現実を交えて再構成し、優れた脚色を施した章に仕立てています。明るい太平洋岸の松島に対して、日本海側の一種沈鬱な趣のある象潟の美が、「松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし」と表現され、象潟の雨に煙る風景に古代中国の美女西施を見る〈象潟や雨に西施が　ねぶの花〉の句が配されます。

越後路

象潟のピークを過ぎ、本文はゴールに向けて筆を急いだ感じになっています。実際には、鼠の関（越後・出羽の境界）から市振まで15日間の旅程でしたが、「越後路十日」の口碑もあり、芭蕉は「此間九日、暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」としています。〈文月や　六日も常の　夜には似ず〉〈荒海や　佐渡によこたふ　天河〉の2句は、孤独と旅愁の色に染められ、特に後者は本紀行きっての絶唱とされます。

市振

親知らず・子知らずなどの難所を越え、旅のつらさの感じられる市振の宿における、伊勢参宮の途にある薄幸の遊女との邂逅が述べられ、〈一家に遊女もねたり　萩と月〉の句が配されています。

金沢

金沢で芭蕉の来遊を待ちこがれながら早世した俳人一笑に対して、芭蕉は心からなる哀悼の意を表しており、〈塚も動け　我泣声は　秋の風〉は芭蕉の慟哭（大声をあげてなげき泣くこと）の叫びで、一笑をしのんで、いたみ悲しむまごころの表現となっています。

那谷寺

「金沢」に続き、〈石山の　石より白し　秋の風〉という秋風の句が詠まれています。秋風は詩歌の伝統の中で詠み継がれてきましたが、芭蕉は秋風の中に新たな情趣を見出そうと努めていたようです。芭蕉の実際の旅では、7月27日（陽暦9月10日）に小松を発ち、夕刻山中温泉に到着し、8月5日まで滞在していました。小松の万子の俳席に出席するため道を引き返す途中、金沢からついてきた北枝と共に那谷寺を訪れたのは8月5日のことですが、紀行本文では、東からの道順に従い、小松→那谷寺→山中温泉としています。

山中

山中での曾良との別離に至る前夜の起伏を抑えた章となっています。芭蕉の山中滞在は、7月27日から8泊9日に及びました。

曾良との離別

金沢あたりから体調を崩していた曾良が芭蕉と別れ、縁故のある伊勢長島へと旅立って行く場面が描かれています。〈今日よりや　書付消さん　笠の露〉は、今日からは一人旅となるから「同行二人」の書付を笠の露で消すこととしよう、の意で、「露」は秋の季語であると共に、芭蕉の離別の涙をも意味しています。

天龍寺・永平寺

丸岡（正しくは松岡）天龍寺参詣から永平寺参詣までの記事で、既に山中で曾良と離別し今また北枝と別れることとなった芭蕉の惜別の情が表われています。

等栽

本紀行終末のヤマ場とも言える章で、離別の続いた後の旧友等栽との再会の喜びが物語的筆致で記されています。

種の浜

「ますほの小貝」を拾うために、西行ゆかりの歌枕「種の浜」に出かけるという風狂の旅の章で、『おくのほそ道』の旅路の最後を飾る清興（上品で風流な楽しみ）を記念する章です。

大垣

この旅を締め括る章で、約5か月間の「奥羽長途の行脚」を終えた芭蕉に対する大垣在住の門人らの歓迎ぶりが記されています。芭蕉の大垣入りは、元禄2年8月21日（陽暦10月4日）までには果たされていたと考えられ、曾良も9月3日、伊勢から到着しています。芭蕉が再び伊勢へと旅立っていく留別（旅立つ人があとに留まる人に別れを告げること）の句〈蛤の　ふたみにわかれ　行秋ぞ〉は、「旅立ち」の〈行春や…〉に照応するもので、ここには人生は旅であるという「序章」で提示された人生観がこめられています。

●芭蕉と「那須の黒ばね」

芭蕉は「那須の黒ばね」に13泊14日滞在しており、これは『おくのほそ道』行脚の中で最も長い滞在期間です。この間、芭蕉は地元の人たちに案内されて雲巌寺をはじめとした多くの名所旧跡・歌枕を訪ね、俳句や連句を作っています。黒羽地区には、この地で芭蕉と曾良が詠んだ句を中心とした10基の句碑が立っていますので、句碑めぐりがお勧めです。黒羽芭蕉の館にはそれらの資料もあり、『おくのほそ道』の概要を示す写真パネルや旅のルートもご覧いただけますので、ぜひご来館ください。

問黒羽芭蕉の館　TEL（54）4151
住所：大田原市前田980番1
営業時間：午前9時～午後5時
（最終入館：午後4時30分）
休館日：毎週月曜（祝日の場合翌日）、年末年始